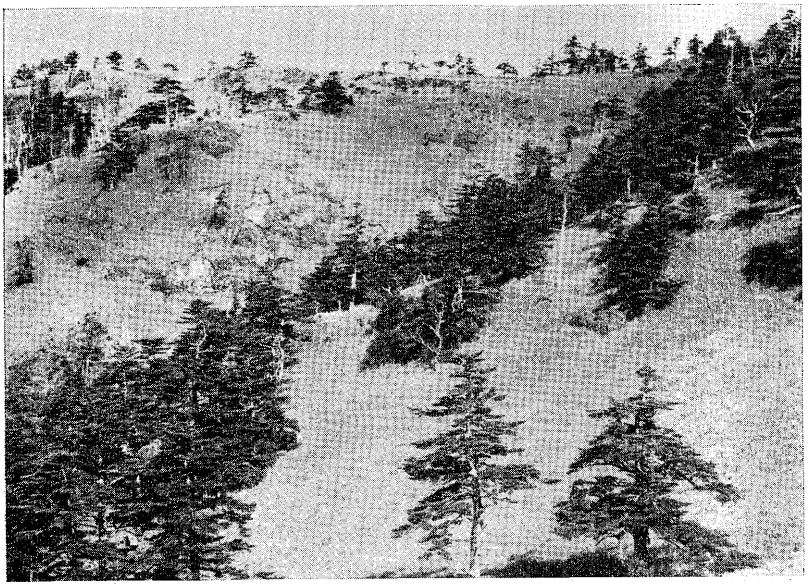
○四国におけるササの開花と枯死（山中二男） Tsugiwo YAMANAKA: Notes on *Sasa* that has flowered and died away in great abundance in Shikonku

四国の石鎚山地では，1965 年からササのいっせい開花が見られはじめ，1966 年には広大な地域で開花結実して枯れつつある。四国での大面積にわたるササの開花は，1954 年以降に剣山，石立山そのほかで見られて以来，1965 年の中津山（明神山）につづいて約 10 年ぶりのことであるが，以前はこのたびほど広い範囲のものでなかった。東は笹ガ峰周辺から瓶ガ森を経て西は石鎚山，堂ガ森にいたる間はもとより，さらに筒上山，



第 1 図. ササが開花枯死した石鎚山地の景観。針葉樹はおもにウラジロモミ（瓶ガ森にて，Sept. 5, 1966).
Dead *Sasa* formation among the *Abies homolepis* stands, Mt. Ishizuchi, Shikoku.

手箱山まで，緑のスロープや林床が，ところどころ未開花のところを残して，すっかり黄褐色にかわってしまった（第 1 図)。石鎚山地の高地に多いササは，はじめイシヅチザサ (*Sasa ishizuchiana* Makino) の名で呼ばれていたが，のちにこれはイガザサ (*S. kurokawana* Makino) とおなじものとされ，最近鈴木 (Jap. Journ. Bot. **19**: 99–125, 1965) によりさらにオモゴザサ (*S. omokoensis* Makino) などとともに，種としてはチマキザサ (*S. palmata* Nakai) のなかにまとめられた。石鎚山地にはイガザサ *S. palmata* var. *niijimai* f. *kurokawana* S. Suzuki) のほか狭義のチマキザサそのものも知られており，これらがすべて開花したものかどうか，まだ調査が不十分であるが，とにか

く四国の南部高地のチマキザサ類の開花をここに記録しておく。

タケ，ササ類の開花の原因には栄養説，週期説などいろいろあるが，事実を資料として残しておくことは，今後何かと必要になると思われる。1950 年前後から集めた標本によると，石鎚山地のチマキザサ類はこの頃から花をつけたものが見られ，そのほか四国各地のミヤコザサ類も現在まで開花したものがかなり採集されている。したがって標本だけでは，開花の状態が明らかでないことも多く，今度のような開花の場合は，やはりはっきりさせておくのがよいであろう。また種類により地域によって，広い範囲にわたるいっせい開花とそうでない場合がある。たとえばスズタケ，ヤダケなどは，この10年間四国の各地で花を見るが，まだ全面的に開花結実した事実はないようで，ネザサ，メダケ，カンチクなどでも，おなじ傾向が見られる。ただオカメザサは，1962-3 年頃から，かなりひろく，花が咲いて枯れた例がある。最もはっきりしているのはマダケで，1958年頃から本年まで各地で竹林が枯れつつある。またキンメイチクの開花については既報（植研 **41**: 57-59, 1966）のとおりである。なお石鎚山地のササの開花とともに注目されることは，低地に野生化しているシャコハンチク（*S. palmata* f. *nebulosa* S. Suzuki）が，1966 年になって各地で開花結実していることである。

この機会に，ササが枯死したあとの植生の回復状態を少しまとめておく。この観察記録は剣山および石立山の海抜 1700 m 以上の場合であるが，枯死した翌年からまずイタドリの侵入が見られる。2-3 年目になるとイタドリが茂るとともにダケカンバ，ノリウツギ，リョウブなどの稚樹があらわれ，またササはところにより既に 10-15 cm にのびている。5-6 年たつとダケカンバの稚樹がいちじるしく増加して，ダケカンバの苗圃とでもいいたいようになり，イタドリもなお多く，ほかに多少の低木類をともなっている。10 年たつとダケカンバの丈は 2 m 以上にのびて幼木林となり，イタドリを圧倒したササが地表面をまったくおおっている。こうしたダケカンバ—ササ群落の期間はそうとう長く継続するものと思われ，場所によってはこのままササの開花をむかえるようである。石鎚山地でも上部では，今後このような植生の変化が見られるものとみなされる。

ただこれがブナ帯の中部以下になると，侵入する植物がかなり異なることはとうぜんで，1965 年に開花した中津山の 1400 m 前後では，ベニバナボロギクがかなり繁茂しているところがあり，これもやがてイタドリ，クマイチゴ，ナガバキイチゴなどにかわるようである。しかし今までの資料から判断して，ブナ帯の中部以下でのササの回復の初期には，ノリウツギ—ササまたはリョウブ—ササ群落が普通に見られ，場合によってはミズナラ—ササ群落を考えることができる。こうした事実から，気候的または土地的極盛相以外では，パイオニアとなる上層木の年令調査から，条件しだいでは過去におけるササの開花をあるていど推定することもまったく不可能ではないと思われる。また，このようなササの開花枯死による変遷のくりかえしは，植生の歴史をさらにさかのぼって検討するさいにも問題にならないともいえない。

（高知大学教育学部生物学教室）